

特色あるカリキュラムについて

—他大学の状況と信州大学の試み—

中野和朗

昨今の大学改革のキーワードの一つは、「特色ある（あるいはユニークな）カリキュラム」である。そもそも「特色」というのは、「他のものと目立って違っている個所。他のものと比べて優れている点。」（「大辞林」）ということである。では、信州大学の新しいカリキュラムは果たして特色あるものとなっているのかどうかである。一般教育の専担部局であった教養部を廃止して全学の協力で教養（一般）教育を行うという改革は、平成3年度の岩手大学、京都大学を皮切りに平成9年度の鹿児島大学他4大学をもってひととおりに終了する⁽¹⁾。

この第1ステージが終わった時点で各大学はそれぞれの改革の中でどのようにこのキーワードを実現しているのであろうか。各大学のシラバスの中からそれを探ってみる。他大学の新しいカリキュラムと比べてみると、自ずから信州大学のカリキュラムがどのようなものかが見えてくるにちがいない。

どの大学も基本的には、従来の教養（一般）教育課程と専門教育課程の横割り積上げ方式という課程区分を廃止して、教養教育と専門教育を学部理念・目的に則した4年（6年）一貫教育カリキュラムに改めたという点では共通している。この面だけ見れば、今回の改革は画一的に見える。しかし、各大学のシラバス（いずれも平成8年度版）を詳細に調べると新しいカリキュラムは思いのほかバラエティに富んでいることが判る。

例えば、新カリキュラムでは、いわゆる教養教育の授業科目をどのように名付け、どのようにジャンル分けしているか。この点だけをとってみてもまことにさまざまに興味深いものがある。因みに、アットランダムに幾つかの大学のシラバスを選び、それがどのようなになっているか紹介しよう。

北海道 大 学	全学教育科目	<ul style="list-style-type: none"> ○ 保健体育科目 ○ 教養科目 <ul style="list-style-type: none"> 人文科学分野 社会 // 自然 // 論文指導（人文・社会科学分野の一部として開講30人程度のゼミ方式） 総合講座（専門分野を異にする複数の教官が担当） 一般教育演習（1年次生対象。いわゆる新入生ゼミナール） 共通分野（教養科目のうち、学問の名称をそのまま授業科目名とするものや、一定の内容をもつものを含む。学部により基礎科目とできる） ○ 基礎科目（いわゆる専門基礎）
------------	--------	----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

		<p>○ 外国語科目</p> <p>○ 日本語教育及び日本事情に関する科目</p>
九州大学	<p>全学共通科目</p>	<p>○ 教養教育科目 教養科目 コア教養科目〔リレー式講義〕 (歴史と異文化理解A, 同B, 人間と社会A, 同B, 現代社会の構造A, 同B, 地球と生命, 数理と情報, 物質の世界)</p> <p>周辺教養科目(個別テーマによる科目) 個別周辺教養科目(一人の教官の担当) 総合科目(専門分野の異なる複数の教官の担当)</p> <p>高年次教養科目 言語文化科目 健康・スポーツ科学科目</p> <p>○ 基礎科学教育科目(自然科学の基礎的知識や方法についての科目) 基礎科学科目(1, 2年次生向け) 上級基礎科学科目(高年次生向け)</p> <p>※ 広域選択履修方式 学部ごとに定められた一定の単位数について, 全学共通教育科目の中から科目区分にとらわれず, 学生の意向に応じて自由に選択できる制度</p>
京都大学	<p>全学共通科目</p> <p>1. 京都大学の教育課程の基礎となる科目</p> <p>2. 学部によってはその専門の基礎となる科目</p> <p>3. 高度一般教育としての教養科目</p> <p>などがあり, これは各授業科目に対して固定的なものではなく, 各学部の学問の特徴や学生の履修様式によってかわる。</p>	<p>A群(人文・社会科学系科目) B群(自然科学系科目) C群(外国語科目) D群(保健体育科目)</p> <p>群をまたがる科目として A・B群, A・C群, B・D群の区分あり。</p> <p>※ 学部によっては, 全学共通科目の履修に科目指定や推奨をしたり, A・B群, A・C群, B・D群科目の群間の振り替えに制限があったり, 専門科目として履修することを可能にしているなどの場合あり。</p>
金沢大学	<p>教養的科目</p>	<p>○ 総合科目(専門の異なる複数の教官が担当)</p> <p>○ テーマ別科目 自然</p>

		<p>社会 人間（保健体育関連科目を含む）</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 一般科目〔個別科目の入門，概論（自然，社会，人間の3領域あり）〕 ○ 言語科目〔A（未習言語初級コース），B（既習言語中級コース），C（既習言語上級コース）の区分〕 ○ 基礎科目〔理系学部（理，薬，医，工）の基礎科目〕 （各科目にゼミナールがある） <p>※ テーマ別科目と一般科目は，一体性をもった教養教育を目指して，第一科目群（現代の科学と文化），第二科目群（環境・情報），第三科目群（歴史・時間），第四科目群（思想・芸術），第五科目群（共生社会の創造）に分類されている。</p> <p>履修方法に「集中履修方法」（特定の科目群から集中的に履修する）と「均等履修方式」（各科目群から均等に履修する）がある。</p>										
茨城大学	教養科目	<ul style="list-style-type: none"> ○ 共通基礎科目 外国語科目 健康・スポーツ科目 情報処理関連科目 ○ 主題別科目 分野別科目（人文・社会・自然科学分野） 総合科目（学際的科目，市民教養的科目人間文化論，科学技術文明論） 主題別ゼミナール 										
神戸大学	全学共通授業科目	<table border="0" style="width: 100%;"> <tr> <td style="width: 30%;">○ 教養原論</td> <td style="width: 40%; text-align: center;">主 題</td> <td style="width: 30%; text-align: center;">授業科目</td> </tr> <tr> <td></td> <td style="text-align: center;">(人文) 人間形成と文化 文学と芸術 歴史と社会</td> <td rowspan="3" style="text-align: center; vertical-align: middle;">それぞれに3-4つの授業が開設されている。</td> </tr> <tr> <td></td> <td style="text-align: center;">(社会) 人間と社会 現代社会と法・政治 現代社会と経済</td> </tr> <tr> <td></td> <td style="text-align: center;">(自然) 自然と環境 自然の構造 数の世界</td> </tr> </table>	○ 教養原論	主 題	授業科目		(人文) 人間形成と文化 文学と芸術 歴史と社会	それぞれに3-4つの授業が開設されている。		(社会) 人間と社会 現代社会と法・政治 現代社会と経済		(自然) 自然と環境 自然の構造 数の世界
○ 教養原論	主 題	授業科目										
	(人文) 人間形成と文化 文学と芸術 歴史と社会	それぞれに3-4つの授業が開設されている。										
	(社会) 人間と社会 現代社会と法・政治 現代社会と経済											
	(自然) 自然と環境 自然の構造 数の世界											
新潟大学	教養科目	<ul style="list-style-type: none"> ○ 総合科目群 ○ 人文科学科目群 ○ 社会科学科目群 ○ 自然科学科目群 ○ 情報処理科目群 ○ 外国語科目群 ○ 保健体育科目群 ○ 日本語・日本事情 <p>人文教養演習（1年次生，小人数ゼミ）11コマ開講 集中外国語（初習外国語について，週2コマ（4時間）の授業，人文学部生対象）4コマ</p>										
山口大学	教養科目	<ul style="list-style-type: none"> ○ 主題別科目 思想と文化 芸術と表現 社会と組織 										

		<p>環境と人間 自然と科学 健康とスポーツ</p> <p>○ 分野別科目 人文科学分野（哲学，日本史，日本文学，外国文学等） 社会科学分野（法学，政治学，経済学等） 自然科学分野（数学，物理，化学等） 応用科学分野（技術概論，情報処理概論，生命科学概論，環境学，運動健康科学，スポーツ運動実習）</p> <p>○ 総合科目 （災害と現代社会，医療環境論Ⅰ，心と環境） リレー式で担当</p> <p>○ 教養外国語科目（2年次生向け外国語）</p> <p>○ 初期教育科目 基礎セミナー（新入生セミナーを含む） 情報処理 日本事情</p> <p>○ 基礎外国語科目（1年次生向け外国語）</p> <p>○ 理系基礎科目 （基礎講義，入門講義，基礎実験）</p>
愛媛大学	共通教育科目	<p>○ 教養教育科目 人文科学科目 それぞれの分野からバランスよく履修するよう学部別指定あり。 社会科学科目 自然科学科目 総合科目 （主として2年次生以上対象） 基礎セミナー （全学生履修，1年次前期各学部・学科毎の小人数で）</p> <p>○ 共通基礎教育科目 外国語科目 スポーツ・健康科学科目 情報科学科目</p> <p>○ 専門基礎教育科目 （全学共通で開設するもの）</p> <p>○ 日本語科目及び日本事情に関する科目</p>
宇都宮大学	共通教育	<p>○ 初期教育科目 初期セミナー</p> <p>○ 教養教育科目 人文科学系科目（哲学，倫理・心理，文学芸術，人文総合の各領域） 社会科学系科目（法学，政治学，経済学，社会学，地理学，歴史学，社会総合） 自然科学系科目（数学，物理学，化学，地学，情報科学，自然総合） 健康科学系科目 外国語系科目（英語R，G，C，独語，仏語，ロシア語，中国語，タイ語，朝鮮語） 複合系科目（日本事情，野外調査等）</p> <p>※ 初期セミナーは国際学部で必修，教養科目の内英語R，G，Cスポーツ・トレーニングⅠ，Ⅱ，情報処理基礎の6科目10単位分の授業科目が全学共通で必修科目指定。</p>

以上を全体的に眺め比較してみると，夫々の大学での夫々の真剣な改革努力の跡がうかがわれるのである。先にも述べたが，ここに紹介した大学は，決して何か特別な理由があっ

選んだのではなく、まったくアットランダムに並べただけである。いわんやお手本とすべき例を挙げたのでは無論ない。しかし、良い悪いは別にして、また似かよった点も多くあるにせよ夫々の大学が夫々に特色を出しているといえるのではなからうか。例えば、特色といえる点を挙げるとすれば次のような点である。

京都大学では、なんと科目区分をA, B, C, Dというアルファベットで学問領域を群に分けて表示している。勿論、アルファベットの後に()でその中身について説明を加えているので、結果的には他の大学とたいして違ってはいないように思われる。しかし、新潟大学の科目群表示と比べてみるとその違いが歴然とする。形の上での科目区分の違いは、基本的な考え方の違いの現われである。A, B, C, Dという冷徹な機械的表示に何故したかは当事者の説明をまたねばならないが、おそらくこうすることによって旧教養部時代からの科目区分にまつわるさまざまな諸問題をこの際はっきり清算したいという強い意志がそこに働いていたのではないかと推察されるのである。これはあるいは邪推かもしれないが、ただ、こうすることによってはじめて群をまたがるA・B群, B・C群という授業科目区分や、群間の振り替えが可能となり、さらには、全学共通科目を専門科目としても履修できるといったことが可能となっているのではなからうか。

すべからく改革というものには、発想の転換が必要であるが、京都大学の場合はその良い例といえる。今度の改革ではほとんどの大学で、率直に言って、扱いに悩んだのが外国語と体育であろう。この二つの蕩児を新しい家にどう迎えるか、その位置づけを巡っての各大学の苦悩が、新しい科目区分の中からうかがい知ることができるのである。多くの大学(例えば、北海道、九州、神戸、新潟、宇都宮等)では、これらを他の科目と同列に横並びに位置づけている。これは従来と同じ発想である。しかし、金沢大学では、保健体育科目は、「テーマ別科目」の中の三つの分野(自然、社会、人間)の内、人間分野の授業科目に組み込まれているのである。これは、大学教育の中で、保健体育科目をどのように考えるかという考え方の違いであって、金沢大学は本質的に異なる発想をしているということである。金沢大学と類似した考え方をしているのが山口大学である。山口大学でも、保健体育科目は科目区分の中で、他のものと同等のものとしては位置づけられていない。それは、主題別科目の6つのテーマのひとつ「健康とスポーツ」として、それに分野別科目の4つの分野の内の「応用科学分野」を構成する授業科目のひとつとして位置づけられているに過ぎない。また、茨城大学と愛媛大学では、外国語、スポーツ・健康科学、情報処理の三つをひとまとめとして、教養教育科目(または主題別科目)と同列のものとして位置づけている。これらは、やはり従来とは異なる考え方に拠っているものといえるであろう。

また、今回のカリキュラム改革は、学問の総合性や学際性が求められる時代状況、情報化や国際化が急速に進展する状況の中で社会が大学教育に求めるものいかに応えるかということも主要なテーマであった。各大学の改革努力はこれに対してもさまざまな対応をしており、いわゆる「コア・教養科目」(九大)、「総合科目」(金沢大、茨城大、新潟大、山口大、愛媛大)、「教養原論」(神戸大)「主題別科目」(山口大)など、特色あるものにしての意欲が見てとれる。

さらに、教養(または共通)教育の履修方法にも夫々に特色がみられる。

「集中履修と均等履修」(金沢大)、「広域選択履修方式」(九州大)、「『教養原論』の学部

指定，高年次履修」(神戸大)，「『全学共通科目』の学部毎の科目指定，群間の振り替え，専門科目への転換履修」(京都大)などがそれである。

ところで，信州大学ではどうなっているのであろうか。信州大学では，現行のカリキュラムを抜本的に見直して平成10年度から第2次カリキュラム改革(「見直しカリキュラム」(仮称))を実施することになっているが，現時点ではまだ確定していないので，ここでは平成6年度から実施している第1次改革カリキュラム(「新カリキュラム」)についての考察をすることになる。

新・旧カリキュラムの概略図は次のとおりである。

旧 教 育 課 程					新 教 育 課 程										
区 分	1年	2年	3年	4年	区 分	1年	2年	3年	4年						
一般教育科目					基 幹 科 目	教 養 科 目 人文科学系 社会科学系 自然科学系 総合科目	学部の理念・目的に基づき編成								
外国語科目															
保健体育科目															
日本語・日本事情															
専門科目															
											外国語科目				
											保健体育科目				
											情報教育				
											新生ゼミナール				
											日本語・日本事情				
					専 門 系 科 目	専門科目 I									
						専門科目 II									
						関連科目			学生の専攻に関連する他学部専門系科目						

注. 松本キャンパスでは，2年次においても一般教育を実施。教育学部，工学部，農学部，繊維学部では1年次のみ。
また，教育学部を除いて，専門科目については“くさび形”の履修。

これをみれば，どこがどう改革されたか，されなかったかは一目瞭然である。

まったく目新しい授業科目は「新生ゼミナール」である。しかし，これも信州大学特有のものではなく，同種のもは他大学でも例えば，「一般教育演習」(北大)，「主題別ゼミナール」(茨城大)，「基礎セミナー」(山口大，愛媛大，宇都宮大)として開設されているのである。この概略図からは信州大学の特色などといえるものはどこにも見てとれないのである。きわめて平準的な改革としか思えない。だが，実は，このような図には現わせないところに信州大学の特色があるのである。

では，信州大学の特色あるカリキュラムは何なのか。そもそも信州大学とは何なのか。他と比べて目立って違っている箇所，優れている点は何なのか。

信州大学の公的出版物である「信州大学の現状と課題」(1994年3月)には次のように記されている。

「(略) 本学の教育改革の在り方について述べるには，信州大学の構成と地域性に着目することが必要となってくる。これは，本学のもつ特色であるとともに独自性につながるものであり，次のような事項があげられる。

① 8つの専門学部と1つの教養部からなる広範な学問領域を網羅する総合大学であること。(平成6年度に教養部は廃止された。一筆者註)

② 全学部に大学院修士課程の大学院を有し、博士課程として医学研究科、工学系研究科が設置され、農学部は岐阜大学大学院連合農学研究科に参加しており、高度な研究組織を有していること。③ 教育・文化・国際交流、経済活動等に対して伝統的に水準の高い環境と熱意を持つ地域社会と密接な交流関係を持っていること。

④ 4つのキャンパスがほぼ長野県全域に分散する典型的な「地域分散型」の総合大学であること。(後略)」(同書, P.211)

信州大学の特色は、おおむね以上のようなことであろう。

さらに、信州大学としては今回の改革の過程で有史以来初めて創り出した⁽²⁾「信州大学独自の教育理念・目的」は、「信州大学の現状と課題」の中で次のように記されている。

「信州大学は、自由な真理探求の学府として、創造的な学術研究を推進する。また、人類が築きあげてきた文化や叡智を継承、発展させるとともに、恵まれた自然と特色ある環境を活かした独自の研究・教育活動を進める。(中略)この理念に基づいて、総合大学としての機能を十分に発揮して、人文・社会・自然科学分野における学術研究の高度化を図るとともに、これら諸分野を有機的に関連づけた調和のとれた総合的研究・教育を推進する。(後略)」(「信州大学の理念・目的」P.2, アンダーラインは筆者)

県としては決して小さな方ではない長野県の全域に分散拡大しているキャンパス事情、そしてその広大な広がりを持つキャンパスを包む四季折々に美しく豊かな自然環境、これらは天与のものであるが、信州大学固有の条件である。特筆すべきは、この天与の条件に依拠して、志賀高原(附属志賀自然教育研究施設)、諏訪湖(附属諏訪臨湖実験所)、野辺山高原(附属野辺山農場)、乗鞍高原(乗鞍寮)、佐久平(附属大室農場)、菅平高原(菅平研修施設)といった名だたる風光明媚な各地にセミナーハウスとして利用できる附置施設を持っているということである。このような恵まれた条件は、他の大学がどんなに願望しても得ることのできない宝物というべきもので、これを特色といわずして何というのか。

俗にタコ足といわれる多地域分散キャンパスは、一般的には、組織運営上の非効率性が重視されデメリットと考えられている。したがってこれまでに多くの大学ではキャンパス統合を実現し、運営の合理化を果たしている。しかし、このことについてもいまや発想の転換を可能とする時代状況が生まれているのではないだろうか。「信州大学の新しい教育課程のあり方(意見書)」(平成4年7月;信州大学将来計画委員会大学教育専門部会)には、次のように記述されている。

「本学が地域分散型大学であることが大きなハンディキャップであるとするこれまでの発想を転換し、地域分散型である利点を積極的に探求し、それらが本学の誇るべき特質と位置付けて教育に反映させる方向に全学の大きな関心が寄せられることが望まれる。」(P.17)と書かれている。「信州大学の現状と課題」にも同様な観点からキャンパス統合問題について触れられている⁽³⁾が、このような発想こそ、これからの信州大学の改革には必要なのではなかろうか。

信州大学のこの比類なきキャンパスの特殊事情のハンディキャップを克服する方策として構築されたのが信州大学画像情報ネットワークシステム(Shinshu University Video and

Data Network System : S U N S)⁽⁴⁾である。

二百数十キロメートルに及ぶキャンパス間の間隔距離を電波によって埋めようというこの方策は、マルチメディア化が急速に進展する中で益々重要性を増している。

さて、信州大学のこのような特色がカリキュラムの中にどう結びつけられるかである。

S U N Sを用いての遠隔授業は、文字通り先駆的なものであり、すでに一定の業績⁽⁵⁾を挙げている。そして教育システム研究開発センターを構成する三つの分野の主要なものが遠隔講義システム研究開発分野であるが、ここでは「S U N Sと学内LANを用いた遠隔講義」についての研究、「V・O・D（ビデオ・オン・デマンド）システムによる実験授業」「マルチビジョンによる遠隔講義」の研究等継続的な研究開発を行っているところである。

現在は実験段階であるが、平成8年度からのS C Sの導入に伴い、このシステムとS U N Sの接続などが可能となれば飛躍的な遠隔講義の展開が期待される場所である。これが信州大学の特色あるカリキュラムの代表的なものといえよう。

教育システム研究開発センターのカリキュラム応用設計研究開発分野では、「本学の地理的・地域的条件を活用したユニークなカリキュラムの研究開発」をテーマに研究開発計画を策定している。それによると①保健体育科目：高地山岳地域にある本学の附置施設の条件を活かし、集団登山、スキー等の技術訓練と、応急処置（高山病、日射病、骨折、負傷等）の講習・実習を組み入れたカリキュラムの開発。②総合科目，新入生ゼミナール：恵まれた自然環境と各地に設置されている附置施設（附属志賀自然教育研究施設，附属高冷地農業実験実習施設，附属諏訪臨湖実験所，乗鞍寮等）を活用しての少人数でのフィールドワークと合宿ゼミによる人間教育，教養教育を中心とする教育方法の研究開発となっている。

この計画に則して、平成9年度の共通教育カリキュラムの新入生ゼミナールの授業科目として「合宿ゼミナール」が実験的に一コマ開設されることになった。このゼミナールのモチベーションとなっているのは次のようなことである。

人間は有史以来文明開化を推進してきた。しかし、一方で文明化の進展とともに人間の本来の野生的生命力が劣弱化していつている。動物としての本来の生命力は人間活動の根源の力であるが、その劣弱化は必然的に人間的活動の劣弱化をもたらす。したがって、教養的、知的能力の涵養と並行して、というよりもそれ以前にこの本来の活力を回復させることが必要なのではないか。

小子化の中で過剰に保護され、電話、テレビ、パソコンを備えた個室で受験勉強に追われてきた学生の多くは、人間が本来持っている創造力や社会性を失いかけている。いわば、文明に病んだ状態で大学にやってきた新入生たちに、先ず必要なのは、人間性回復の手当てである。人と人、人と社会、人と自然とのつながりが断ち切られ、自分の存在が何か分からなくなった人間に必要なのは、なによりもコミュニケーションの回復である。

このような意識がモチベーションとなって「合宿ゼミナール」が設定されたのである。

因みに、シラバスには「合宿ゼミナール」は次のように紹介されている。

1. 授業の狙い：人と人との触れ合い、人と自然との触れ合いを通して、もっとも本質的な人間性を涵養し、自立と共生について考え、大学における学習の意味と学問の方法論について学ぶ。
2. 授業の概要：メインテーマはコミュニケーションである。ゼミナールの全期間キャン

ブと野外炊飯による共同生活を基本とする。授業は講義と演習，フィールドワーク，実習を併用し，小人数による対話と討論を通し，学識を深めるとともに人間の本来的な創造性や社会性を体験的学習を通して涵養する。

3. 成績評価の方法：レポートと全期間の学習を総合的に評価する。
4. 履修上の注意：①通常の授業期間ではなく，夏期休業期間中に3泊4日の日程で実施する。②本年は9月18日（木）～21日（日）に高遠少年自然の家の施設を利用して行う。③全期間を通じて食料費，テキスト代等の実費として5,000円程度（見込み）が必要である。交通費は無料である。④本ゼミナール履修希望者にたいするガイダンスを事前に行うので掲示に注意すること。⑤定員は約25名である。希望者が多い場合は抽選とする。抽選となる場合は掲示により知らせる。
5. 授業計画：（1）講義，①コミュニケーションとは何か②人と人のコミュニケーション③個と社会のコミュニケーション④異文化間コミュニケーション⑤人と自然のコミュニケーション⑥人と宇宙のコミュニケーション等の内容について行う。

（2）実習・フィールドワーク，①合宿という共同生活を通して，人と人，人と社会（集団）のコミュニケーションについて体験的に学習する。②キャンプと野外炊飯という生活を通して，電気，ガス，水道といった文明の恩恵に依存しない生活の方法，知恵について体験的に学習する。③フィールドワークは，自然（山と川）の中に踏み入って，自然の幸を採取しながら人と自然のコミュニケーションを体験的に学習する。施設に附置されているプラネタリウム，天体望遠鏡により，天体を観察し，人と宇宙のコミュニケーションについて実習する。

ところで、「合宿ゼミナール」に類する授業は，他大学ではどうなっているのだろうか。各大学のシラバスより探ってみた。すると意外にもたいへん稀有であることが分かった。知り得た範囲のものを紹介すると次のようである。

- （1）「合宿共同授業」：「科学と人間－混沌の時代をいかに生きるか－」（九州大学）
これは，九州地区の12大学が共同で行っているもので，昭和52年3月に第1回が実施され，すでに21回を数える歴史のある授業である。
- （2）「人間関係論」（京都大学）：合宿形式（2泊3日）によるグループ体験を通じて，かかわり合いの中で，他者および自己を理解し，人間性に対する洞察を深めていくことを目指す。
- （3）「農に親しむ」及び「森と人間」（愛媛大学）：夏期休業中（2泊3日）
- （4）合宿共同授業「時代を読む－現代科学とこころ－」（広島大学）：中国・四国地区国立大学の学生と教職員が，大学を離れた場所（平成8年度は香川県青少年センター）で一堂に会し，「時代を読む」というメインテーマのもとに多角的な授業を進めることによって，豊かな人間観，社会観を養う。また，学生と教職員が寝食を共にしてお互いの人間性に触れ，有意義な交流を深める。

おおむね以上のようなものであるが，九州地区と中国・四国地区の当該地区の国立大学が共同で実施している合宿共同授業はまことにユニークというほかない。瞠目に値するものであり，甲信越ブロックでも試みしてみる値打ちはあるであろう。

「合宿ゼミナール」の試みを待つまでもなく，信州大学では，すでに「新入生ゼミナール

ル」が、いくつかの附置施設を利用して合宿ゼミナールの形式で実施されている⁽⁷⁾。そのほか、多様でユニークな体育実技Cの授業科目の多くが合宿ゼミナールの形式で行われている⁽⁸⁾。平成8年度では、その開設数は25の授業科目に及んでいるのである。合宿ゼミの形態での授業がこれほど多く行われている大学は他にはなく、これも信州大学の特殊なキャンパス事情によるとはいえ、信州大学の特色あるカリキュラムといてよいのではなかろうか。

こう見てくると、SUNSによる遠隔授業といい、合宿ゼミナールといい、信州大学の特色ある授業といえるものは、いずれも、とどのつまりは信州大学特有の多地域分散キャンパスという宿命的条件に規定されたものだということになるが、しかし、これも分散キャンパスのディメリットをメリットへ転換しようという全学のきわめてアクティブな改革意志の顕現だと受け留めるべきであろう。

また、授業内容から見ると、信州という地域性と結びついたものもいくつかある。例えば、「信州の風土と文学」（教養科目、人文科学系）、「信州の自然と文化」（総合科目、環境の変動と保全）、「志賀自然教育ゼミナール」（新入生ゼミナール）、「大室生物生産ゼミナール」（新入生ゼミナール）、「大地が語る信州の4億年」（総合科目、環境・生命のしくみ）、「川と湖の生き物」（総合科目、環境の変動と保全）といったものであるが、これらも他の地域ではできないものであるということでは、やはり特色あるものの中に加えることができよう。

共通教育カリキュラムを制度的に、または、システムとして把え、より総括的により綿密に比較検討する必要があるが、それは改めての作業となる。

註

(1) 教養（学）部組織改編状況一覧 別表1（後掲）

(2) 信州大学独自の教育理念・目的

教育理念・目的が、本学ではどのように扱われていたのかといえば、昭和24年6月1日適用の信州大学学部通則（現在の学則）には、これがいずれの条文にも記載されていない。あえて挙げらば、本学設置時の「信州大学設置要領」に記されている目的及び使命を本学の教育理念・目的と見做すことができる。

その内容は、「本大学は学問立国の精神を以て専門学の各部門に亘り最高の教育を授け学術に於けるその極地を闡明し、且つ之を實際に應用せしむると共に重きを情操教育に置き、知情意円満の人格を完成せしめ以て国家社会に有用な人物を養成することをその目的及使命とするものである。」と謳われている。（中略）

信州大学は、昭和24年「国立学校設置法」の施行により、旧制の高等学校、医科大学、師範学校、専門学校等長野県内のそれぞれの学校が統合されて設置されたものであり、それぞれの学校には、それぞれに個性的で明確な「建学の精神」（教育理念・目的）があった。それはいまでも、それぞれの学部の理念・目的の中に継承されている。しかし、新制の総合大学である信州大学としての「建学の精神」は、学則第1条に謳われているが、それは、「学校教育法」第52条の文言をそのまま掲げたにすぎず、およそ信州大学としての独自の「建学の精神」などと言えるものではない。言うなればこれまで40年以上に亘って、我が信州大学ならではの「建学の精神」（教育理念・目的）といったものは暗黙の了解としては存在したが明確に確認されなかったことになる。

今回の新カリキュラムの検討に先だって、これまで不在であった「信州大学独自の教育理念・目的」が是非とも全学の意志として確立される必要がある。この教育理念・目的の実現達成のため

めに全学的な体系的な一貫教育としての教育課程が編成されるのである。

〔信州大学の新しい教育課程のあり方（意見書）〕平成4年7月信州大学将来計画委員会大学教育専門部会、P10-12)

(3) 「大学の全学部が一箇所に統合されているということは、大学としての組織、教育、研究、管理、運営という、いわば閉じた大学の側面からは理想的な形態であり、通常の大学では当然の姿であると受け取られているに違いない。しかし信州大学にとっては、問題はそれ程単純なものではなかった。

信州大学の母体となった旧制の大学や高専は、それぞれユニークな伝統と校風を持ち、独自の教育方針に基づく教育を行って、永年にわたり多くの卒業生を送り出してきた。しかしながら、これらの諸学校が、もともと地域意識の強い長野県の、東信、北信、中信、南信の各地に分散していたという事情と、新制大学が、戦後の不安定な社会状況の中から、いわば天の声によって慌ただしく発足したという事情とが相俟って、信州大学の各学部は、総合大学の学部としての連帯意識の形成よりも、むしろ学部の独立性および地域との一体性を強調する傾向が強かったように思われる。その結果、学部の地域分散問題は散発的に論じられることはあったにしても、どちらかといえば、地域分散を与えられた境界条件として受け取り、その枠の中での議論に終始することのほうが多かった。いうならば、大学の現状にあまりにも慣れすぎてそれを消極的に肯定し、本格的に突き詰めた議論は行われることのないまま、今日に至ったというのが偽らざる状況ではなかろうか。

いわゆるタコ足とよばれるこの問題にも、永年にわたる時間の経過により、いろいろな利点と欠点、それなりの立場から主張されている。たとえば利点として挙げられるものは、各学部とその地域との歴史的、社会的、文化的連帯感の存在、全県レベルのテクノハイランド構想等を通じての地域社会への貢献、地域社会への経済的波及効果等がある。また欠点として挙げられる主なものは、管理運営面からは、会議運営、事務組織・図書館組織の特異性と非効率、研究面からは、学部間の共同研究、共同利用大型機器の導入・利用等の制約、教育面からは、一貫教育の制約と教育組織の非効率等がある。

しかしながら、最近の高速交通網の発達、情報伝達組織網の格段の進歩と充実、従来の県内各キャンパスの距離感を大幅に短縮されることになった。さらに大学と地域社会との関係にしても、これまでの地域都市と個々の学部との連携を超えて、総合大学としての信州大学と、長野県全体との密接な連携を如何にして確立するかが問われているのである。また、この問題は、大学の教育改革と関連して、大学活動の点検・評価の視点からも改めて取り上げられようとしている。

こういった状況の変化を視点に置きながら、改めて信州大学の全学統合という、いわば古くて新しい問題を、原点から検討し直すことが必要ではなかろうか。(同書、P3)

(4) 信州大学画像情報ネットワークシステムの設置

本学の歩みを語る上で、どうしても落とすことのできないのは、画像情報ネットワークシステムの設置である。

前にも述べたように、信州大学は、松本市の旭キャンパスに大学本部、人文学部、経済学部、理学部、医学部、教養部を置く他、長野市の西長野キャンパスに教育学部と若里キャンパスに工学部、上田市の常田キャンパスに繊維学部、上伊那郡南箕輪村南箕輪キャンパスに農学部と、その学部は長野県全体にわたって分散している。このことは教育・研究面でも、また大学の管理・運営面でも長い間、総合大学としての機能発揮の大きな足枷となってきた。特にこの問題は、信州大学大学院修士課程を基礎として、総合大学院博士課程を設置しようという将来構想の推進に当たって、大きな欠点であると考えられた。この障害を克服するために信州大学が打ち出したのが、信州大学画像情報ネットワークシステム (Shinshu University Video and Data Network Sys-

tem; 以下SUNS サンズという。) 構築計画である。

この構想は、長野県のほぼ中央に位置する美ヶ原高原(標高2,034m)に設置された中継点を基点として、信州大学の各キャンパスをマイクロ波(長野市若里キャンパスと西長野キャンパス間は光ファイバー)によって結ぶことにより電波というニューメディアを用いて全学の総合力を集約・発揮させると同時に、キャンパスのインテリジェント化を図るもので、アメリカ等にその先例はあるものの、分散キャンパス間における遠隔講義・会議等の実施は、国立大学最初の試みとして注目を集めた。1987年から6年の歳月をかけて1993年に完成した、いわば全学統合のソフトシンボルとも言えるものである。SUNSは現在、遠隔講義、遠隔会議、コンピュータ自営オンラインシステム、全キャンパス間の内線電話等に利用しており、教育研究および管理運営面で学部間の交流は飛躍的に促進されている。さらに、1993年度においては、SUNSの有効活用を図るため、各キャンパスにループ型LANを敷設し、全学をマイクロ波回線で結ぶことにより学内LANを完成させる運びとなっている。このシステムのもう1つの特徴は、それが大学の教育・研究活動と地域社会の産業・技術あるいは文化の発展とを結ぶ大きな架け橋として機能することである。たとえばこのシステムを利用すれば、学外者がある学部で開催される公開講座を聴講するために、わざわざその学部まで出向かなくても、それぞれ県内最寄りの学部の講義室で受講できるわけである。また、最近さげばれている生涯教育という面からも、このシステムの活用は、県内各地域が相互に往来しにくい長野県の地理的状況からみると、大学の地域への貢献のきめ細かい実現として大きな意義をもつことが期待できる。このようにSUNSは、それぞれのキャンパスを地域に密着したままソフト面で全学的に統合するという、地域分散型大学のユニークな智恵として、高く評価されている。

このようなネットワーク型大学活動を意識的かつ一層先端的に展開して、地域分散配置を利点として活用できるように、信州大学の大学活動の発想と方法を充実してゆくことも、重要な視点ではなかろうか。(「現状と課題」P. 7)

- (5) 平成9年度各学部と共通教育センター間のSUNSを利用した授業計画 別表2(後掲)
- (6) 「マイクロ波画像情報ネットワークシステムを利用した遠隔授業に高等教育の研究」
(平成3年3月、工学部教授丹野頼元他)
- (7) 「平成8年度共通教育履修案内」(いわゆるシラバス)から2~3の例を示す。別表3(後掲)
- (8) 別表4(後掲)

別表 1

教養（学）部組織改編状況一覧

(平成9年3月3日現在)

大学名	実施年度	改編の状況等	教養部長等	対応事務部	備考
北海道	平成7年度	高等教育機能開発総合センターの設置		学務部	
弘前	(9年度)	理工学部、農学生命科学部の設置(9.10改組, 学生受入れは10.4~)		企画室	
岩手	3年度	人文社会学部 1学部 1学年 3専攻コース	人文社会学部長	人文社会学部	
東北	5年度	国際文化研究科等, 大学教育研究センター, 留学生センターの設置	大学教育研究センター長	国際文化研究科等事務部	
山形	8年度	人文学部, 工学部等への分属, 充実(7年度に自然系の大半の教育理学部へ移行)		庶務部企画室	
茨城	8年度	人文学部, 教育学部, 工学部, 農学部等への分属, 充実	大学教育研究開発センター長	庶務部企画室	※
宇都宮	6年度	国際学部 2学科 4講座	共通教育委員会委員長		
群馬	5年度	社会情報学部	共通教育運営委員会委員長		
埼玉	7年度	既設学部への分属, 充実 共通教育委員会の設置	共通教育委員会委員長	庶務部企画室	
千葉	6年度	分属方式 外国語センターの設置	大学教育委員会委員長		
東京	5年度	教養学部の充実 大学院重点化として進行中	教養学部長		
東京医科歯科			教養部長	教養部事務部	
新潟	6年度	既設学部, 改組・転換学部へ移行	大学教育開発研究センター長	庶務部企画室	※
富山	5年度	既設学部への分属, 充実 教養教育委員会の設置	教養教育委員会委員長	庶務部企画室	
金沢	8年度	既設学部への分属, 充実 外国語教育研究センターの設置		庶務部企画室	
岐阜	8年度	8.10 地域科学部の設置(学生受入れは, 9.4~)	地域科学部長	企画室	
静岡	7年度	7.10.1 情報学部の設置	情報学部長	庶務部企画室	
名古屋	5年度	情報文化学部 2学科 12講座	情報文化学部長	共通教育室	8.4~学務部
京都	4年度	総合人間学部	総合人間学部長	総合人間学部事務部	
大阪	6年度	国際公共政策研究科, 全学共通教育機構	全学共通教育機構長	国際公共政策研究科等事務部	
神戸	4年度	国際文化学部 2学科 11大講座	大学教育研究センター長		
鳥取	7年度	既設学部への分属, 充実 大学教育センターの設置	大学教育センター長	庶務部企画室	※
岡山	6年度	環境理工学部	一般教育実施委員会委員長	庶務部企画室	
広島	3年度	総合科学部	総合科学部長		
山口	8年度	既設学部への分属, 充実	共通教育センター長	庶務部企画室	※
徳島	5年度	総合科学部	大学教育委員会委員長		
愛媛	8年度	既設学部への分属, 充実		庶務部企画室	
九州	6年度	比較社会文化研究科, 大学教育研究センターの設置	大学教育研究センター長	比較社会文化研究科等事務部	
佐賀	8年度	8.10文化教育学部の設置(学生受入れは, 9.4~)	全学教育センター長	企画室	※
長崎	(9年度)	環境科学部の設置(9.10改組, 学生受入れは10.4~)		企画室	
熊本	(9年度)	既存学部への分属, 充実		企画室	
鹿児島	(9年度)	既存学部への分属, 充実		企画室	
琉球	(9年度)	既存学部への分属, 充実		企画室	
信州	7年度	既設学部への分属, 充実 教育システム研究開発センターの設置	共通教育センター長	庶務部企画室	※

注) ※印の茨城大学の「大学教育研究開発センター」、新潟大学の「大学教育開発研究センター」、鳥取大学の「大学教育センター」、山口大学の「共通教育センター」、佐賀大学の「全学教育センター」及び本学の「共通教育センター」は学内施設であり、それ以外のセンターは省令施設である。

別表 2 平成9年度各学部と共通教育センター間のSUNSを利用した授業計画

担当学部	授 業 科 目	対象学部	対 象 学 科 等	学 年	必修・選択・自由別単位数	開講期	曜日・時 限	備 考
教育学部	心理臨床学総論 【専門科目Ⅰ】	教育学部	小学校教員 養成課程 心理臨床専攻	1年	必修2単位	後期	金曜日 4	担当： 川島一夫教授
教育学部	心理臨床学セミナー 【新入生セミナー】	教育学部	小学校教員 養成課程 心理臨床専攻	1年	必修2単位	前期	金曜日 4	担当： 守一雄教授
教育学部	美術教育セミナー 【新入生セミナー】	教育学部	小学校教員 養成課程 美術専攻 中学校教員 養成課程 美術専攻	1年	必修2単位	後期	月曜日 1	担当： 木村仁助教授
経済学部	法学（日本国憲法） 【基幹科目】	教育,農, 繊維学部	全 学 科	2年	選択2単位	前期	木曜日 3	担当： 田中聖教授
工学部	環境都市基礎力学 【専門科目Ⅱ】	工学部	社会開発工学科 （土木コース）	1年	必修2単位	前期	水曜日 2	担当： 学科(土木コース) 各教官
工学部	建築概論 【専門科目Ⅱ】	工学部	社会開発工学科 （建築コース）	1年	必修2単位	前期	木曜日 4	担当： 学科(土木コース) 各教官
繊維学部	感性工学 【総合科目】	全学部	全 学 科	1年	選択2単位	前期	木曜日 1	担当： 佐渡山亜兵教授
繊維学部	機能高分子学概論 【専門科目Ⅱ】	繊維学部	機能高分子学科 ----- 応用生物科学科 ----- 素材開発化学科	1年 1年 1年	選択2単位 自由2単位 自由2単位	後期	火曜日 3	担当： 学科関係教官

別表 3

授業科目	社会科教育ゼミナール				題目番号	700	教官名	やまもと きよし 山本 潔 他	
	開講期	前期	曜日・時限	集中	対象学生	E I (小・社, 中・社)			
新 入 生 ゼ ミ ナ ー ル	1. 授業の狙い (1) 社会専攻学生が4年間で学ぶべき教育・研究内容を理解させる。 (2) 8月に実施する志賀高原合宿ゼミを通し、自然の基礎的法則を学ばせることによって、学校教育の一環としての自然教育への導入機会とする。 2. 授業の概要 (1) 事前学習(4月~7月) 社会科関連諸科学について概説する。 志賀高原合宿ゼミのガイダンスを行う。 (2) 志賀高原合宿ゼミ(8月5日~7日) 主に自然観察を行う。 3. 成績評価の方法 (1) 主に平常点によって評定する。 (2) 志賀高原合宿ゼミについては、レポートの提出を求める。 4. 履修上の注意 (1) 教育学部社会専攻必修科目 (2) 必要経費は個人負担とし、共通経費は7月6日(土)事前学習の折に徴収する。				[共通経費] 長野市~志賀高原交通費(往復) 3000円 食費(6食分) 4100円, 施設使用料1670円 資料代ほか1230円 合計10000円 5. 授業計画 4月8日(月) 事前学習(その1) 社会専攻ガイダンスおよび社会科関連諸科学入門講座 5月 日() 事前学習(その2) 社会科関連諸科学入門講座 6月 日() 事前学習(その3) 社会科関連諸科学入門講座 7月6日(土) 事前学習(その4) 志賀高原合宿ゼミのガイダンス 8月5日(月) 志賀高原合宿ゼミ ~7日(水) 8月5日午前10時 教育学部集合 8月7日午後3時 教育学部解散				
		書 名				著 名 等	発 行 所	価 格	
	教科書								
参考書									

授業科目	教育実践科学ゼミナール				題目番号	700	教官名	しも だ よし ゆき 下田 好行 他	
	開講期	前期	曜日・時期	集中	対象学生	E I (小・教)			
新 入 生 ゼ ミ ナ ー ル	1. 授業の狙い 志賀の美しい自然に肌でふれあう。自然の声に耳を傾け、自然の息吹を肌で感じる。こうした経験を通じ、「自然との関係のなかで生きる人間」の自覚を促す機会としたい。また、4年間一緒に生きる仲間—教育実践科学の学生—の親睦を深める機会ともしたい。 2. 授業の概要 (1) 事前学習 7月6日(土)第1・2限 9:00から、事前研修を行う。 (2) 合宿ゼミ 9月9~11日(2泊3日)に、志賀自然教育研究施設で実施する。 3. 成績評価の方法 事前研修の参加、合宿ゼミの参加、レポート(合宿ゼミの振り返り)による。 4. 履修上の注意 ・受講票は事前研修、専攻別ガイダンス(7月6日)の時に集める。 ・事前研修は授業の一環ですので、必ず出席すること。 ・研修にかかる費用は個人負担で、以下の通りです。 費用は事前研修(7月6日)に集めますので、必ず持参してください。				松本—長野の交通費 長野—志賀高原交通費(往復) 3000円 食料(6食分) 4100円 施設付帯使用料 1670円 資料代他 1230円 合計 10000円 5. 授業計画 ・事前研修 7月6日(土)第1・2限 9:00から 全体研修 志賀施設の先生からの説明・諸注意 専攻別研修 専攻で志賀での研修の内容の決定 ・合宿研修 9月9~11日(2泊3日)於 志賀自然教育研究施設 信大自然観察園での野外観察と実習 専攻別研修活動				
		書 名				著 名 等	発 行 所	価 格	
	教科書	当日配布							
参考書									

授業 科目	授業題目	障害児教育ゼミナール			題目番号	700	教官名	た ま き よ し た か 田 巻 義 孝 他	
	開講期	前期	曜日・時限	集中	対象学生	E I (養)			
新 入 生 ゼ ミ ナ ー ル	<p>1. 授業の狙い 新入生を対象にして、神経遅滞児（者）居住施設での施設実習を通じて、精神遅滞児（者）の教育・療育に携わる職業人としての自覚を培い、居住施設の理解を深めることを願う。</p> <p>2. 授業の概要 実習生としての立場（補助的な）立場を忘れずに、精神遅滞児（者）や施設職員との交流を深め、移住施設の業務内容を学ぶこと。</p> <p>3. 成績評価の方法 (2) 必要経費 [往復交通費、施設宿泊費、食費等] は個人負担とする。 (3) 受講者は、原則として、20名以内とする。</p> <p>4. 履修上の注意 (1) 施設実習において、次の諸点に留意すべきである。</p>				<p>・どのような仕事でもやり遂げること。 ・自分から仕事を探すこと。 ・施設内ではチームで仕事をしているので、協力して仕事を進めること。 ・仕事上の疑問は素直に尋ねること（自分一人で処理しないこと）。など (2) 必要経費 [往復交通費、施設宿泊費、食費等] は個人負担とする。 (3) 受講者は、原則として、20名以内とする。</p> <p>5. 授業計画 実習期間、必要経費等については、別途指示する。</p>				
		書 名			著 名 等	発 行 所	価 格		
	教科書								
参考書									

別表 4

授業 科目	授業題目	体育実技C（ゲーム・キャンプ）			題目番号	557	教官名	は し も と じ ゅ ん い ち 橋 本 純 一 他	
	開講期		曜日・時限	集中	対象学生	全			
体 育 実 技	<p>1. 授業内容及び履修上の注意 近代スポーツの特徴である競争性を最小限にしつつ、参加と協同を最大の目的に、人間と自然環境との相互的な関係から生ずる「交流」を主眼におくエコロジカルなゲーム……アメリカで盛んな Nature Game, New Game 等……を集中形式でキャンプ生活を送りながら行う。</p> <p>2. 成績評価の方法</p>								
		書 名			著 者 等	発 行 所	価 格		
	教科書等								

授業 科目	授業題目	体育実技C（総合野外活動）			題目番号	553	教官名	ふ る や け ん い ち 古 屋 顯 一 他	
	開講期		曜日・時限	集中	対象学生	全			
体 育 実 技	<p>1. 授業内容及び履修上の注意 本授業は、野外活動における様々な種目を体験する。そしてそれらの体験を通して、自然の中での活動に必要な基本的知識、技術、ルール・マナー、またその考え方などについて学び、生涯スポーツへの導入を図ることをねらいとする。 授業概要は、1) 集中形式 2) 夏期 2泊3日（乗鞍高原）8月下旬を予定。オリエンテーリング、溪流釣り、ソロ活動など。 冬期 2泊3日（乗鞍高原）12月下旬を予定。クロスカントリースキーなど。 履修上の注意は、1) 定員約45名。 2) 授業経費は自己負担。 3) 詳しい日程、経費は体育実技Cガイダンス時に提示。</p> <p>2. 成績評価の方法 出席を重視する。</p>								
		書 名			著 者 等	発 行 所	価 格		
	教科書等								